

問い合わせ先：
ショウナ・シウダ
ライオンズ・インターナショナル広報部長
+1 630-468-7075
Shauna.Schuda@LionsClubs.org

即時リリース用

ライオンズ国際平和作文コンテストにおいて、トルコの小学6年生 イェトカ・ヤーズ・デミルタス君が大賞を受賞

(イリノイ州オークブルック) - トルコ・アンカラ出身のイェトカ・ヤーズ・デミルタスさん(12歳)は、平和とは何かについて詳細に理解しています。デミルタスさんは、賞を受賞した作文「私の心の引き出し」を書くことで、世界に自分の考えを知らせるために紙とペンを取りました。この作文の中で、彼は自分に何が期されているのか、どうすれば日々最高の自分になれるかについて、私たちがよく考える複雑な内面的な会話を描写しています。

「ライオンズ国際平和作文コンテストは、単に文章を書くだけでなく、自分の考えを生き生きとしたものにする力を若者に与えます」と、ライオンズ・インターナショナルのパティ・ヒル会長は述べています。「イェトカの思慮深い言葉は、世界を変える力が、目に見えるものだけでなく、世界中の地域社会で勇気をもって夢を見、達成しようとするものにあることを証明しています。」

ライオンズ国際平和作文コンテストは、目の不自由な青少年に平和への思いを表現する機会を与えるために創設され、世界中のライオンズクラブの主力事業となっています。ライオンズは地元の学校や地域家庭と協力して、このコンテストへの参加に関心があり、プログラム参加が本人のためにもなりそうな青少年を見つけます。

「平和は世界共通で、言語、宗教、人種、国などありません。それは誰もが共通して持っていることです」とデミルタスさんは言います。「人生は必ずしもうまくいくとは限りませんが、断固として、たゆまず行動することが必要です」

今回彼の作文が大賞に選ばれた理由は、独創性、構成がしっかりしていること、そして今年のテーマ「夢見る勇気を」を上手に描いたその表現力です。

イスタンブールのアルトゥンテペ・ライオンズクラブが、地元でのコンテストをスポンサーし、この才能ある6年生に世界的なイベントに参加する機会、そして彼の平和への言葉を世界と共有する機会を提供しました。デミルタスさんは作文を通して、地球上の誰もが日々のスケジュールを持っているけれども、こうした日々の仕事の先には、より大きな使命がある、と述べています。それは、すばらしい生徒、友人、そして家族の一員となることであり、心を開いて耳を傾ける姿勢を持ち、学び、成長する、という使命です。

「私は常に和解について考えています。私たちを救うものがあるなら、それは誰もが平等な権利を持ち、平和に暮らす世界であるべきです」と 12 歳の少年は加えました。「これは若い世代だからこそ進めることができます。誰もが自分の権利と責任を知り、尊重すれば、誰もが平和に暮らす世界が生まれるのです。」

余暇に デミルタスさんは水泳、詩を読むこと、芸術、聖歌隊に参加することを楽しみ、大人になったら歴史の教授や古生物学者になりたいと願っています。コンテスト入賞者であるデミルタスさんには賞金の現金 5,000 米ドルと記念品が贈られ、ライオンズ・インターナショナルの主要な行事に VIP として招待される予定です。彼の作文やコンテストの詳細は lionsclubs.org/peace-essay から閲覧できます。

ライオンズ・インターナショナルは、世界 200 を超える国と地域の 140 万人以上の男女が集まる世界最大の会員制奉仕クラブ組織です。ライオンズ・インターナショナルは、世界中の青少年の心に平和と国際理解の精神を育むために平和作文コンテストの開催を始めました。

2023～2024 年度ライオンズ国際平和作文コンテスト大賞受賞者
イェトカ・ヤーズ・デミルタス、12 歳
「私の心の引き出し」

今日、私は長い道のりのために勇気を奮い立たせた。そして心の引出しを開けた。

私は一番上の引き出しから始めた。なぜなら、最も使われているものは常に一番上にあるから。そこで毎日の課題を見た。何をすべきか、勉強すること、食べること、歯を磨くこと、そして多くの似たようなこと。

しかし、これらは私が本当に見つけたいものではない。だから、私は最初の引き出しをそっと閉じた。

それは二段目の引出しの番だった。「今度こそそれを見つけよう」と思った。そこには少し違ったものがあつた。思い出として、また自分の心に残った象徴的な物として私が持っているもの。両親がドアを開けさせてくれた鍵。しかし、私は一人では帰ってくることはない。その時に、私はこの鍵は実はこれが自分の家であり、自分もこの家族の一員であることを教えるためのものだ気づいた。それから、私は父が 9 歳の誕生日に私にくれたノートを見た。最初のページにはこのように書いてあつた。

「息子よ、私の誇りよ、愛する者よ…お前はこのノートにあるような多くのページにメモを取り、非常に重要な科学者になると信じている。幸運を祈っている。愛しているよ。お父さんより。」

今、12 歳の私イェトカ・ヤーズは、父が私に非常に貴重な贈り物をくれたということを理解している。それはすなわち彼の私に対する信頼だ。

そう理解した私は、心の中の三番目の引出しへと移った。今度は、もっとわくわくしながら引き出しを開けた。しかしすぐに、中は真っ暗だと気付いた。しかし、黒は常に暗闇を意味する

わけではない。私はその暗黒の真中を深く見つめた。「できないよ、気をつけろ、難しいよ」と皆がいつも私に言っていることを思い出した。そのとき、一筋の希望の光が目の前に輝き、こう言った…「怖がらないで、イェトカ！夢見る勇気を持って！」

私は、希望と想像力に目を閉じた「本当に目が見えない」人々の中に、勇気をもって自分の心を見抜いた。私は空に向かって頭を上げ、夢を見た。彼らが言ったように、私は色を見ることができなかったが、私の想像力の中で虹に千もの色を追加した。白が常に明るいとは限らず、黒が怖いとは限らない。これらはすべて、私たちの心の引き出しの中に積み上げられた誤解だ。

私には4つ目の引き出しがなかった。最初からやり直したくても新しい引き出しが見つかるとは限らない。しかし私は空の黒い引き出しに夢を詰め込むことができる。それが私が今していること。私がこれまでに行ってきたこと、そして私の自信が、私が正しい道を歩んでいることを証明している。

父が願っているように、私は科学者になる道を進んでいる。これは、視覚障がい者にとっての夢と考えられるかもしれない。しかし、私にはそれを実現させる勇気がある。私は今日水泳が得意で走ることも得意だ。それは成功を夢見たからこそ。今こそ、誰にも止められることなく、「夢見る勇気」を持ち続ける時だ。私の旅は希望に満ちている。そしてそれは永遠に続く。